

南無阿弥陀仏は
私のいのち



〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
<http://saitokuji.tobihiro.jp/>
発行人 岸本 秀一
印刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



(撮影 国分尚三氏)

便利になった

今日、日本のインターネット普及率は八十六%、その利用率は八〇%にも及んでいる。

世の中のあらゆる情報を調べたり、簡単な操作で手軽に買い物も出来るような、非常に便利なサービスが提供されている。そのような背景が、ここまでインターネットを普及させているのだろう。

しかし、利便性の向上を求め、面倒な事や無駄な物を省く思考は同時に、直接人に会って物事を尋ねたり、お互いの顔を見て会話をするよ
うな大切な機会を失わせてしまったのかもしれない。

そういう意味で利便性が向上する事は、私達が多くの人・物・環境等に支えられながら生きて
いる現実を、見えにくくするような時代になっ
たと言える。自分にとって楽な関係だけを求め、
面倒な関係を断ち切ろうとする在り方は実に
身勝手だ。それこそ、どんな関係であれ、支え無
しでは生きていけない我が身の事実が見えてい
ない証拠である。

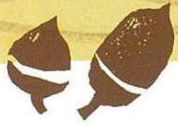
私達は一体何に支えられ生きているのか。利便性を追
求する時代だからこそ、誤魔化しの効かない我が身を、
教えに問い尋ねていく事を勧められているように思う。

(大橋 伊知郎 記)

秋季永代経法要



「喜寿記念法話」 “賜る信心” 法話 大谷義博最高顧問



去る9月22日(月)、満堂になった西徳寺本堂で秋季永代経法要が勤まり、併せて大谷義博最高顧問が喜寿を迎えられたことをご縁として「記念法話」をいただきました。

はじめに岸本住職より挨拶があり、「16才で美しいのは自慢にはならない。でも60才で美しければ、それは魂の美しさだ」という言葉を紹介され、人間のいのちは年齢で判断されるのではなく、その人が出遇っているものによって輝くのであるといわれ、これまで59年間にわたり西徳寺で活躍されてきた大谷顧問の歩みを讃えられました。

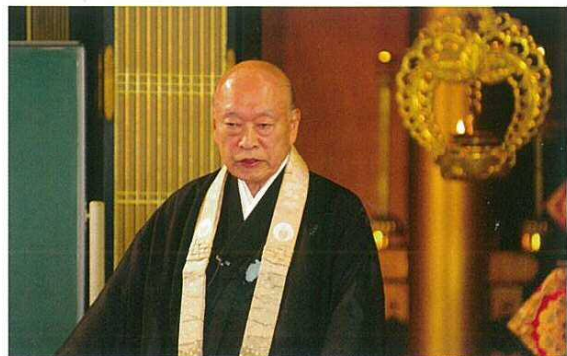
続いて大谷顧問よりご法話をいただきました。講題は「賜る信心」とされ、よき師法然上人が親鸞聖人に語られた言葉であることを示されました。「賜る信心」とは「いただく信心」であるが、「信心はするもの」だと疑わない私たちにとって、そこがなかなか領けないところであるとのことでした。

真宗大谷派の曾我量深師は、90歳のお祝い之時、門弟の方に向かって「初めてのことでございます」といわれ、90年目のいのちに出遇った感動を述べられ、生かされておるいのちの不思議さを喜ばれたことを紹介され、人間のいのちとは私のはからいを超えて事実となる、生老病死していくいのちであると語られました。

この世に生まれ、歳を取って、病んで、終わっていく。私のいのちは死とともにある。このいのちの中身は、誰とも較べることのできない、それぞれが輝くことのできる人生であって欲しいという願いが、私のいのちの中に流れているといわれました。東本願寺が出した御遠忌ごおんきのスローガンである「今、いのちがあなたを生きている」を取り上げられ、自我を中心にして「歳を取るのは嫌だ」「病気は嫌だ」「死に別れるのは嫌だ」と避けておる自分の心の中に、それを引き受けて、これが私の人生であり、それが今日を生きる私のいのちだと受け止めさせていただく道を開くのが南無阿弥陀仏である。それこそが法然上人を通して親鸞聖人がいただかれた道であり、「賜る信心」という言葉で言い表されるのだと教えてくださいました。

最後にお得意(?)のマジックで参詣者の笑いを誘い、和やかな雰囲気の中に記念法話を閉じられました。

(木村 専正 記)



お念仏を伝承してくださった六人目の高僧は、日本の源信僧都(942~1017)です。僧都は、奈良県の当麻に生まれ、幼くして父を亡くし出家して、比叡山で学問を深められました。ある法会の講義でいただいた名誉の品を、当麻で一人暮らす母に贈りました。ところが、今風の教育ママ的な視点に関心のない母は、「名声のために僧になつてもらうのでない、この母を救うてほしい」という手紙を添えて、贈り物を返されたと伝えられています。

名利心の離れがたさに気づかれた僧都は、隠棲の地といわれる横川の恵心院(源信僧都は恵心僧都ともいう)にこもって、さらに道を求められ、主著の『往生要集』を書かれます。『往生要集』は、「小一切経」ともいわれ、多くの經典や論書を引いて、往生の要(かなめ)を集めた書物で、中国にも伝えられました。この書の冒頭で「それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。予が如き頑魯の者(かたくなで愚かな者)といわれるように、愚か者の濁世の目となり足となるのは、お念仏のみと「偏に帰して」勧められました。それで親鸞聖人

は、「源信、広く一代の教を開きて、偏に安養(浄土)に帰して、一切を勧む」と讃えられます。次に、僧都は「専雑の執心、浅深を判じて」と、「専の執心」は深く、



正信偈の話 39 松井憲一

源信広開一代教 偏帰安養勸一切 専雑執心判浅深 報化二土正弁立

(源信、広く一代の教を開きて、偏に安養に帰して、一切を勧む。専雑の執心、浅深を判じて、報化二土、正しく弁立せり。)

「専雑」の「専」は、専ら本願に誓われた阿弥陀仏の名号を称える専修念仏のことです。専修は、聖人が「専修は本願のみなをふたごころなく、もっぱら修するなり

意」といわれるように、その時の都合で、ふたごころになる自分がいつも教えられ、ひるがえされていくお念仏のことです。阿弥陀仏のおこころに触れて、「妄念はもとより凡夫の地体なり(横川法語)」と自分の正体を思い知らされる心で、深い心といわれます。

「専雑」の「雑」は、自分の正体

が見えないから自分の力で救われろと思つて、念仏以外の行も雑修で修める雑修のことです。それで、専修念仏にまかすことができずに、自分の思いであれもこれもと雑修

するのですから、いかに励んでも浅い心といわれます。

さらに、僧都は「報化二土、正しく弁立せり」と、阿弥陀仏のお浄土は「報土」と「化土」の二つに別れると、正しく区別して明らかにされたと讃えられます。報土は、愚かな人びとも救おうという阿弥陀仏の本願に報われて開かれた世界ですから、「真実報土」ともいわれます。そして、化土は、自分の思い描く自己満足の世界ですから、「方便化土」であつて、慢心と停滞を免れないといわれます。

だから、聖人は、「源信僧都のおしえには 報化二土をおしえてぞ 専雑の得失さだめたる(『高僧和讃』)」と報土と化土の区分けは、専心と雑心という、信心の違いであるといわれます。わたしたちは、本願の名号に出遇えば、報土に生まれることはおまかせなのに、お念仏までも自分の心にあわせて、取り込もうとしてしまいます。聞法者の「これで、ようやく腹に落ちました」という声に、「違う、腹が落ちるのだ」といわれた先生の言葉が、思い合わされます。

山門の言葉

覚え込んだ仏法は 自己解釈である

安田 理深



大事な家族を亡くしたから、家がお寺の近くにあったから、生まれがお寺だったから。仏法に触れる縁は人それぞれである。その縁をきっかけとして仏法に学ぼうと聞法していくのである

が、学び始めた時は、難しい言葉に戸惑い、言葉を覚えていくことが大変だった。

学んでいく中で、念仏の道は念仏して弥陀にたすけられる、自己に目覚めよという仏の祈

りの声を聞き続けていく道であると教わる。教わっていないながら、聞いている私たちは、自分の思いや都合で受取り、言葉として覚え込もうとする。

その私たちの在り方を安田理深師が自己解釈でしかないと仰っているのである。真面目に学べば学ぶほど、道を求めていたはずが、知識を求めるようになっているのである。

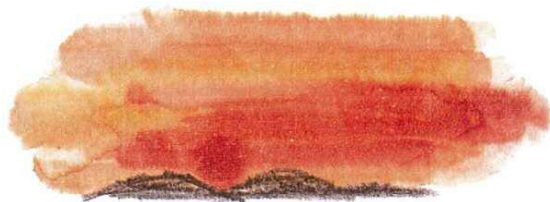
仏法は単に言葉を解釈することではない。人間の迷い続けた歴史が言葉にまどなって呼びかけているのだ。その仏法を覚え込んで、理屈として捉えようと、そこに自分がなくなり、他人事になる。そうなると責任を持たない。煩惱具足の身と教えられても、解釈している我が身となり、現実の自分と切り離される。そうなると痛くも痒くもない。

人間が抱えてきた事実を、痛

みをもって明らかになってきたのが念仏の歴史なのであり、自分の思いに閉じこもっているその身を痛み、目覚

めよと喚びかけ続けて下さる阿弥陀仏のはたらきに、どこまでも立ち帰っていかれた歴史なのである。仏法は個人的な解釈にとどまることではなく、一人ひとりが身の事実に出遇っていき、大事な機として私たちを見いだしてきたのである。

(仲井 真裕 記)





えこお志お礼

ご浄財を頂戴いたしましてありがとうございます。
ご芳名の掲載をもってお礼とさせていただきます。

逗子市 西村 チエ 様
葛飾区 小松 正秀 様
台東区 飯高 多嘉子 様
板橋区 木下 好江 様
台東区 大林 藤枝 様



日誌

- 9月20日～26日 秋季彼岸会
9月22日 秋季永代経法要 喜寿記念法話 大谷 義博師
9月27日 混声合唱団「エコー」練習
同行会「現代の聖典」に聞く 法話 山崎 哲
9月27日・28日 宗祖忌
10月1日 責任役員会・総代会
10月4日 混声合唱団「エコー」練習
10月7日・8日 中興忌
10月10日 仏教クラブ「気仙沼へ義援金贈呈式」
10月11日 混声合唱団「エコー」練習
同行会「現代の聖典」に聞く 法話 大橋 伊知郎
10月12日 中央ブロック会総会・聞法会(本堂・参加者33名)
10月15日 婦人会聞法会 「釈尊伝」に聞く
10月16日 『唯信鈔』に聞く(第8回) 講師 宗 正元師

掲示板 平成26年11月

1日(土)・2日(日)

報恩講
両日布教使 福井 憲雄師

5日(水)

婦人会バス旅行(箱根方面)

8日(土) 午後6時

同行会「現代の聖典」に聞く
法話 蓮井 邦宗

9日(日) 午後2時

城西ブロック会聞法会(中野商工会館)

15日(土) 午後1時半
午後3時半

定例聞法会
混声合唱団「エコー」練習
城北ブロック会聞法会(大塚 大和田)

16日(日) 午後2時

18日(火) 午後7時

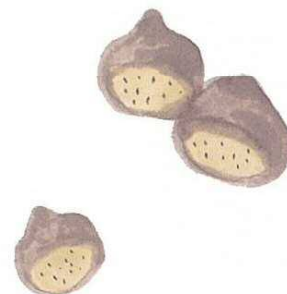
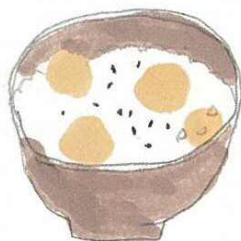
仏教青年会報恩講
法話 大島 義男師

19日(水) 午後1時半

『唯信鈔』に聞く(第9回)

22日(土) 午後6時

講師 宗 正元師
同行会「現代の聖典」に聞く
法話 仲井 真裕



中央ブロック会総会・聞法会

去る10月12日、中央ブロック会総会と聞法会が西徳寺本堂にて行われました。今回は元会長であった榮田昌弘さんがお越しになり、他ブロック会からも竹内乾一郎さん、津久田愛之助さん、石井正一さんが来られ、合計33名の参加となりました。

本間明会長の挨拶では、とある雑誌の誌面から会長が気になった記事を紹介していただきました。それを通して煩惱を取り上げ、「私達は状況や環境が変化すれば、何をすべきかわからない」と所感を話していただきました。

本間会長の挨拶の後には、評議員会会長である竹内さんから「聞法会を通して、もっと皆さんと話し合いたい」とご挨拶をいただきました。

総会を終えて、岸本住職よりご法話をいただきました。その中で、阿弥陀仏は光そのものであり、常に煩惱を抱えている身がはつきりすることが光(仏のはたらき)であると教えていただきました。

聞法会後は、梅檀の間で懇親会が開かれ、参加者の皆さんから法話を通して感じられたことを話していただきました。中には「私は毎日後悔が無いように過ごしているから、悩みが無い」と話して下さった方がいて、とても印象に残りました。

次回は来年4月5日に湯島天神・梅香殿にて行います。皆様のお越しをお待ちしております。(高橋 淳 記)

編集後記

霜月は「霜降り月(しもふりつき)」の略とする説が有力だといわれます。いよいよ秋から冬へと移りゆく季節を迎えます。

今月は京都の佛光寺本堂で「御正忌報恩講」が厳修されます。宗祖親鸞聖人のご恩に応えるということは、ただ一筋に弥陀の本願を聞き開いていくことだと教えられます。ちなみに11月27日は、大師堂において夜通しで布教が行われます。(主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス:

HP <http://saitokuji.tobihiro.jp/>

ゆうちょ銀行お振り込み口座 00120-0-80670 名義 西徳寺

※「えこお」に対してのご意見・ご感想をお寄せ下さい。(メールでも結構です)

✉ saitokuji@ce.wakwak.com